

「声は命、言葉は命」

いわき市立小名浜第一中学校 1年 星 羽音

「大丈夫。大丈夫だから、私の心、折れないで。そうしたら、明るい未来が待っているから。」

「吃音症」どのくらいの人が、この障がい名を知っているのだろうか。これは、言葉を滑らかに話すことのできない発話障がいの一つである。

私には「おおおおにぎり」の様に、最初の音を繰り返す「連発」という症状がある。他には、「おーにぎり」の様に最初の音を伸ばす「伸発」や「・・・おにぎり」の様に言葉を発するまでに時間のかかる「難発」という症状もあるらしい。母の話しによると、三才の頃からこの症状が出ているそうだ。

吃音について調べてみた。全体の七〇～八〇％は自然治癒するといわれているが、残りの二〇～三〇％は症状が残るそうだ。有効な治癒法は明らかになっていないという。私はこの二〇～三〇％に属していると思われる。

目に見えて伝わりにくい「吃音」によって苦しさや不安を抱えている人がいることを、みなさんは知っているだろうか。私もその一人である。日常会話ではもちろん、音読をする時や人前で発表する時など、緊張している場面では普段より吃音が出てしまうのだ。その度に、事前に何度も練習をしたり、頭の中でのシミュレーションを重ねてきた。なぜなら、何も知らない周りの友達から、からかわれたりマネをされたりしてきたからだ。

そんな私にとって自己紹介というのは、一番苦痛でハードルが高い。中学校に入学し、当然ながらその時間がやってきた。初めて出会う人が多い中で、小学校の時の様に笑われたり、からかわれたりするのではないかと今までの出来事が走馬灯の様に思い出され、不安と恐怖から、家で何度も何度も母に相談をした。しかし、その場に立つと吃音の出るタイミングがわかるため、言葉を発することをいつも以上に意識してしまい、結果、出てしまう。そうなると、もう自分の心は悪循環でしかない。周りの目が気になり、笑われている、からかわれていると思ってしまうのだ。そんな風に思ってしまう自分が嫌になり心が折れかけ、あふれそうになる涙を何度もグッとこらえた。

また、周りの友達に吃音が出ていないことがわかると、
「私、普通じゃないのかな。」

と考える様になり、自分に自信を失くしていった。そんな状況でも心が折れず

にいられたのは、家族のおかげだ。ずっとそばで支え続けてくれているからだ。

母は、後ろ向きになっている私を見て、

「あなたは、神様から選ばれた人なのよ。だから、自分に自信をもたなくちゃね。」

と言ってくれた。母は、言葉を発することや友達とコミュニケーションをとることに憶病になっていた私を励ますために、この言葉をかけてくれたらしい。そのおかげで、吃音が出る自分も受け入れられるようになり、今では自分に自信がつき、勇気がもてるようになっている。

私は今、毎日が充実していて幸せだ。今までの自分では想像ができないくらい強く、明るくなっている。また、少しずつ吃音を理解してくれる友達が増え、受け入れてもらえることがとてもうれしい。理解してくれる友、支えてくれる仲間感謝している。それでも、辛い思いをしなくなったわけではない。

ただ、今は自分に吃音が出るということ、吃音がどういうものなのかを周りに伝えられるようになってきた。全てを理解してもらうことは難しいが、友達や先生、家族が協力してくれているおかげで、自分を好きになれた。色々な事に挑戦できるようになり、自分に自信がもてるようになっている。すると、不思議な事に、心がスッと軽くなってきた。

そんな時、とあるドラマの中での台詞が頭をよぎった。

「音のない世界は悲しい世界じゃない。うれしいこともいっぱいある。」

「それは、聴者もろう者も同じ。」

である。私の考え方が変わるきっかけとなったのだ。自分の気持ちや今までの出来事と重なる部分が多くあり、勇気が沸いた。

将来、私は人に寄りそう仕事に就きたいと考えている。障がいを抱える人もそうでない人も、全ての人が明るく暮らしやすい社会にするためにはどうしたらよいかを意識していきたい。悩んでいる人に自分の経験を伝え、少しでも前を向いて生きていけるよう支えられる人になりたい。そして、吃音を色々な人に知ってもらい、理解してもらえるように努めていきたい。

それぞれの個性を受け入れ、誰もが安心して過ごせる世の中になるよう、これからも自分にできることをしていこうと思う。みんな違ってみんないいのだから。